

庭野平和財団 活動助成事業  
平成 21 年度最終報告書

第 2 回アジア学院平和シンポジウム『土からの平和 2』  
2009 年 11 月 5 日～7 日

2010 年 9 月 17 日

学校法人 アジア学院  
アジア農村指導者養成専門学校

活動目的

アジア学院の学生たちが活動するアジア、アフリカ、大洋州の農村では、多くの人が社会的、経済的に不利な状況に置かれており、内戦や紛争の影響を最も大きく受ける。一方、農村は豊かな自然や農業、持続可能な生活様式、相互扶助的な共同体の繋がりなど、平和な社会づくりのための大きな可能性を秘めている。

2007 年度、アジア学院では、農村の現状や平和構築のための様々な取り組みを理解し、平和構築に農村が果たす役割を探るべく、世界から 8 人の平和活動家を招いて平和シンポジウム「土からの平和」を開催した。そして、参加者全員で「土からの平和共同宣言」を採択し、平和な世界は実現可能であること、それぞれの人々が平和をつくるための道具となりうることを確認した。またアジア学院は、今後のカリキュラムで紛争解決や平和構築をより重視し、世界各地の同窓生会やアジア学院後援会による平和への取り組みを促すことを宣言した。

2009 年度第 2 回平和シンポジウム「土からの平和 2」は、2007 年平和共同宣言を踏まえて、参加者が平和のための具体的な行動へと踏み出すことを目的に行われた。本シンポジウムでは問題の原因と影響を再認識するだけに留まらず、創造的に問題に対処する術を見出すことを目指した。紛争地域で非暴力による平和構築を実践してきた講師と、様々な地域から集まる草の根の農村指導者たち、日本の一般参加者が集うことで、多様かつ実践的な学びの場となることが期待された。

## 2007年 土からの平和共同宣言

私たちは、農村指導者として平和の道具となりうる機会を与えられています。私たちは土を耕し、健全な環境で食べ物を生産することで、全ての命は互いに支えあっていることを認識しています。生きることは他を必要とすることなのです。私たちは、各々の地域の農業者組合、農業技術研修、教会、農村支援を行う NGO などで、持続的で豊かな生活の実現に努めます。こうした地域社会での草の根の働きを通して、平和と協力の礎を作ります。

農村指導者にとっての大きな課題として、貧困、資源へのアクセスの制限や政治的影響力の不足、性差別があげられます。地域社会が弱く、適切な就労機会が確保できない状況においては、若者は武装グループに取り込まれやすくなります。あるいはそのような社会の暴力の犠牲者ともなり得ます。さらに僻地においても武装グループに襲われたり、戦闘への参加を強制されたり、または政府軍に徴兵され戦闘地域に派遣される危険があります。

私たちは、政府とその他の軍事勢力に対し、平和で建設的な活動を武力に優先させることを提言します。また平和と安全保障を促すため、人々と連携します。そして、平和構築・紛争解決・対話の促進について学び続け、平和がすべてに優先されるべきであることを訴え続けます。

2007年9月

アジア学院 「土からの平和」参加者

## 活動内容と方法

2009年11月5日から7日の3日間、栃木県那須塩原市のアジア学院キャンパスにて、国内外からの講師を招き講義とワークショップを取り混ぜたシンポジウムを行った。講師および参加者は以下の通りである。

講師：

レジナ・ラマリンガム氏 スリランカ国民平和協議会 (NPC) 事業最高責任者  
大畑豊氏 非暴力平和隊日本 (NPJ) 共同代表、元平和旅団 (PBI)  
大島みどり氏 非暴力平和隊日本 (NPJ) 理事、元フィールドチームメンバー  
鎌田陽司氏 NPO「懐かしい未来」代表

参加者一覧表：

アジア学院研修生

ヴェン・バン	男性	カンボジア	カンボジアバプティスト連盟
アジョン・クリスティーナ・フォンゲ	女性	カメルーン	慈愛の地域教育農村開発教会
郭 春霞	女性	中国	農薬エコ・オルタナティブセンター
マリー・ロミノ・ラアオ	女性	フィリピン	フィリピン正公会
ナザリオ・ドルヌアン・トゥギナイ	男性	フィリピン	農漁業協議会
キングスリー・ナムカ・ニューロキナ	男性	ガーナ	マータントウッドゥ協会
マンブング・ヘチン・ハイコチン・ハオキップ	女性	インド	弱者のための開発協議会
カルナン・スダーカル	男性	インド	社会行動のための地域運動共同体
フーゴ・デ・グロット・ナバハン	男性	インドネシア	インドネシアキリスト教会
東島 達也	男性	日本	
堀池 舞子	女性	日本	
斎藤 絵里香	女性	日本	
竹之下 萌愛	女性	日本	
エマニュエル・カリサ・バヤ	男性	ケニヤ	参加型開発研究所
キシンビリ・フランシスコ・シンゴロ	男性	ケニヤ	フェイス・ケニヤ
ホンパン・センチャントン	男性	ラオス	日本国際ボランティアセンター
サン・ドウ	男性	ミャンマー	カヤー・バプティスト教会
ノウ・パティ・ポ	女性	ミャンマー	ミャンマー聖公会
シーラ	女性	ミャンマー	リス・バプティスト同盟
ソー・シェキナ	男性	ミャンマー	カレン・バプティスト教会
ピシュワ・ラジ・グルン	男性	ネパール	ネパール開発学研究所
ロザニ・クムワル	女性	ネパール	チッタボル村落開発委員会地域開発財団
ニル・マヤ・ラナ	女性	ネパール	持続可能な農業推進センター

マハナーズ	男性	パキスタン	地域開発協会
ジョセフィン・ メムナ・ シャルカ	女性	シエラレオネ	カリタス・フリータウン&ボ
ヘーワギ・ トウシャラ・ ニルミニ・ ヘーワギ	女性	スリランカ	女性開発連合
シワコン・ オードーチャ	男性	タイ	持続可能な開発教育推進研究所
カヌンニット・ ポルカヤン	女性	タイ	代替農業ネットワーク
エド・ アグボド	男性	トーゴ	トーゴメソジスト協会
リリー・ クザイ・ ピリ	女性	ザンビア	ザンビア合同協会

#### アジア学院トレーニング・アシスタント

ラコー・ ザチボル	女性	インド	東洋神学校
ソウ・ ジャクソン	男性	ミャンマー	ネピドーYMCA
シャンタ・ チョウドリー	女性	ネパール	後進社会のための教育協会

#### アジア学院 卒業生インターン

土井 智代	女性	日本	
石田 綾子	女性	日本	
内田 真紀子	女性	日本	岡崎わんぱく寺子屋

#### 一般参加者

石原明子	女性	日本	熊本大学
李 亘	男性	韓国	立命館大学

### 1 1月5日午前 (10:15~12:15)

#### 開会とオリエンテーション

アジア学院校長の大津健一より挨拶があり、その後、副校長・教務主任の荒川朋子より同シンポジウムの経緯と目的、内容について話した。07年度に採択した「土からの平和共同宣言」を参加者全員で読み上げ、「平和ってなに？」をテーマに簡単なワークショップを行った。参加者は3つのグループに分かれ、以下の3つの質問について話し合った。

1. 平和とは何か？
2. 農村で平和をつくる可能性となるものを3つあげてください。  
(あなたのコミュニティにすでに存在するもので、平和に役立つものは何ですか?)
3. 農村の平和にとって困難なこと(問題となっていること)は何ですか？

その後、各グループの代表が話し合いの結果を発表し、参加者全体と共有した。

### 1 1月5日午後 (14:00~16:30)

特別講師レジナ・ラマリンガム氏が「軍事的勝利の中での平和への取り組み (Working for Peace in the Context of Military Victory)」と題した基調講演を行った。午前中に行ったワークショップに引き続き、「平和とは何か」を考えるため、積極的平和と消極的平和の概念の紹介、平和における「平等」「持続可能性」の大切さなどを話した。その後、スリランカの内戦の概要とスリランカ国民平和評議会(NPC)の理念と活動内容の説明があった。またその中でNPCが強調している「多元主義 - Pluralism」が非暴力による紛争解決に不可欠だとした。ラマリンガム氏は、農村指導者が平和構築に果たす役割の重要性を言及し、アジア学院研修生たちに次のようなメッセージを送った。「農村指導者としてあなたたちは、近代的な世界が押し付けようとする競争を避けるべきです。地元資源や伝統文化があなたたちの強みです。世界を変える自分自身の力を過小評価してはいけません。」講演後は、参加者からの質問を受け、活発な議論を行った。

### 1 1月5日夜 (19:30~21:30)

始めに「グローバルからローカルへ(仮題)」のDVDを鑑賞した。このドキュメンタリーは、インドのラダックに開発がもたらした急速な変化を映した「懐かしい未来:ラダックから学ぶこと」の続編である。グローバリゼーションがもたらす悪影響に焦点を当てた後者に比べ、前者はグローバリゼーションの対抗軸として、世界各地でのローカリゼーションの取り組みを紹介している。DVD鑑賞後に特別講師の鎌田陽司氏による講演があった。鎌田氏はドキュメンタリーを振り返りながら、また参加者にも問いを投げかけながら、グローバリゼー

ションの負の側面、またローカリゼーションの取り組みについて列挙、比較を行った。そして、地域経済の活性化が真の平和と開発につながることを強調した。

#### 1 1月6日午前 (10:00~12:00)

大畑豊氏と大島みどり氏より、非暴力平和隊の理念と活動について講演を行った。まず、大畑氏が平和運動そして非暴力平和隊に関わることになった経緯を話した。その後、非暴力平和隊のプロモーションDVDを鑑賞し、大島みどり氏が講演を行った。大島氏は、非暴力平和隊スリランカのフィールドワーカーとしての経験を元に、非暴力平和隊の活動についてより具体的な説明を行った。

とくに、どのように任国の紛争に非暴力的に介入するのかについては、1) 人権・平和活動家の護衛的動向、2) 国際的プレゼンス、3) 情報発信、4) 対峙しているグループ間での物理的な「割り込み」など、非暴力平和隊の手法の中心となる活動を紹介した。

#### 1 1月6日午後 (13:45~15:45)

##### ワークショップ グループ A-1 「非暴力って何？」

大畑氏と大島氏がファシリテーターとなり、非暴力による紛争解決を考えるための導入的なワークショップを行った。ワークショップ中の基本的なルールを説明した後、アイスブレイキングのために「フルーツバスケット」のゲームをした。その後、参加者はペアになり「自分の好きなこと/もの」「子ども時代の思い出」をお互いに話し合った。そして自分のペアの相手について、参加者全体に紹介するというアクティビティを行った。

参加者は2グループに分かれ、それぞれ2枚の模造紙に「暴力」「非暴力」で思いつく言葉を書き込む作業を行った。このとき、その言葉が「暴力」「非暴力」に当てはまるかを議論することはせず、各参加者が自由に書き込む形式をとった。その後、参加者全員で模造紙に書かれた言葉を見て、気になった言葉について説明や議論が行われた。このアクティビティによって、「暴力」「非暴力」という言葉の持つ多面性や人それぞれの受け止め方の違いが明らかになった。最後に、参加者全員が目隠しをしたまま1本のロープを持ち、言葉によるコミュニケーションと感覚だけで全員で大きな四角をつくるアクティビティを行った。これは視覚に頼らないコミュニケーションを体験、練習する目的だった。

#### 1 1月6日午後 (13:45~15:45)

##### ワークショップ グループ B-1 「開発と平和」

鎌田陽司氏のファシリテーションにより、開発と平和がどのように両立しているかを考えるワークショップが行われた。

「懐かしい未来：ラダックから学ぶ」の映像を3部分に分けて、重要な部分をとくに抜粋して鑑賞した。映像を元に主に3つのテーマを考え、議論した。

- 1) ラダック人の伝統的な智慧、技術、知識とは何か？
- 2) 1974年に開発が始まって以来、ラダックに何が起こったのか？
- 3) 開発と平和はどのように両立できるのか？どのように平和をもたらすことができるのか？

参加者からの意見を引き出しながら、これら3つの点についての議論を行った。

11月7日午前(10:00~12:00)

ワークショップ グループ A-2 「非暴力の実践」

2日目の非暴力ワークショップでは、さらに非暴力的なコミュニケーションの理解を深め、体験するアクティビティを行った。

まず、アイスブレイキングのために「フルーツバスケット」を行い、また円状に座って、「私は●●(国)から来ました。帰国してまずやりたいことは●●です」という文章で、それぞれの思いを共有した。このアクティビティによって参加者がリラックスし、場がゆるんだようであった。

次に、以下の状況が暴力が非暴力かを議論した。

「あなたは村で野菜を育てています。ある日、隣人が高い塀を畑の横に建てたため、野菜が陰になってしまいました。あなたは隣人に塀を撤去するようにお願いしましたが、彼は耳を傾けてくれません。そこで、あなたは塀を壊してしまいました。このあなたの行動は暴力的ですか？それとも非暴力的ですか？」

「塀を作った隣人の努力を考えずに塀を壊してしまうのは暴力的」という意見と、「塀を撤去するようにお願いをしたのに、隣人は耳を傾けなかった」ため非暴力的だという意見の両方があった。

また、「合意形成」についてのアクティビティを行った。大島氏が「反対から賛成」までの段階を表した図を示し、前述の塀をめぐる争いを元に議論を行った。社会に起きる出来事にははっきりとした善悪の白黒は付けられず、多くの場合はグレイであることが多い。丁寧な合意形成の重要性などを議論し、また参加者それぞれからも、各コミュニティで行われている合意形成の方法などが紹介された。

次に行われたのは「怒り」に関するアクティビティである。参加者はペアになり、時間を区切って「怒ったときにどうなるか？」を相手に話して共有した。ペアを変えながら何度かこれを繰り返した。このアクティビティによって自分自身と怒りの関係や、怒りとの付き合い方を学んだ。

最後に、ジェンガという積み木玩具を使ってゲームをした。(積み重ねた木のピースを、倒れないように一つ一つ抜き取るゲーム) このゲームをきっかけに、何が権力を支えているのかを考えた。参加者からは、金、銃、資源、人、法律な

どがあげられた。大畑氏は、非暴力はこれら権力を支える要素を壊す力だと説明した。

#### 1 1月7日午前 (10:00~12:00)

ワークショップ グループ B-2 「ローカリゼーションに向けて」

鎌田氏は「平和な社会のためのビジョン」と題した図を示しながら、グローバリゼーションの道を盲進するのではなく、平和で持続可能な社会のための方向転換が必要だと話した。

#### 1 1月7日午後 (14:00~16:30)

それぞれの学びを参加者や講師と共有し、3日間のまとめを行い、本シンポジウムでの学びを、各地域でどのように行動に移していくのかを考えた。まず、ワークショップのグループ A と B から、2日間のセッションの報告が行われた。そして、特別講師の4名からそれぞれコメントがあり、閉会となった。この3日間のシンポジウムの成果を踏まえて、2009年度「土からの平和」宣言を採択することが決まり、アジア学院の学生2名が宣言文をとりまとめる担当となった。

### 活動の成果

#### (1) 短期的な成果

参加者たちは、平和は自分自身から、自分たちのコミュニティから始まるという意識を持ち、自分やコミュニティの持つ平和構築への可能性を発見することができた。「ローカリゼーション」という新しい概念を得たことで、今までの自分たちの地域での活動をより大きな視点から捉えることができるようになった。また、自分たちの活動の意義や今後の方向性を再認識するうえでも重要な概念となった。アジア学院の通常の研修の中でも、地域の人的および物的資源の有効活用やグローバリゼーションの功罪について学ぶ機会があったが、これらを「ローカリゼーション」という視点で捉えなおすことで、バラバラにとらえていた情報や概念がまとまったのではないかと考えられた。

非暴力による紛争解決については、身近な紛争や一对一のコミュニケーションを題材にしたアクティビティを多く行うことで、理論だけではなく実体験をとおして参加者が、自分たちの言動と平和構築の関連性を意識できるようになった。実際に紛争地で非暴力による介入を行ってきた講師たちとの意見交換も、参加者にとって刺激的な経験になったと考えられる。



## (2) 長期的な展望展開

参加者たちからは、シンポジウムで学んだことを自分のコミュニティの人たちにも伝えたい。同様のワークショップを開きたい、などの声が多く聞かれた。本シンポジウムでの学びが、世界各国の農村で伝えられることが期待される。また、「ローカリゼーション」の概念を、自らの将来の活動計画に加える学生も見受けられ、シンポジウムの成果が彼らの長期的なビジョンに大きな影響を与えたと考えられる。具体的には、教育のローカリゼーションとして、地域資源の大切さや豊かさ、伝統的な智慧、農村の価値観を若い人たちに伝える場（学校）をコミュニティに作りたいという学生がいた。また、アジア学院を卒業後に自分のコミュニティへと戻り、ピースシンポジウムで学んだこと、とくに新たな開発の方向性としてのローカリゼーションについて村人に対してワークショップを行なったという報告も届いている。

また、これらの学びが他のアジア学院卒業生たちにも共有されることを期待する。現在、スリランカ、東北インド、東アフリカ、フィリピンの同窓生会が活発に活動を展開しており、ネパールとミャンマーの同窓会も発足したばかりである。今後はインドネシアやケニア、リベリアの卒業生の組織化も予定されている。これら同窓会を通して、平和シンポジウムでの学びが多くの人々と共有され、継続的な平和運動となることが期待される。

日本在住の参加者にとっては、世界各国の農村リーダーと学ぶユニークな3日間となった。日本における問題に対して、非暴力的、またローカリゼーションの考えを取り入れながら、どのように活動を行っていくのか、それぞれが深く考える機会であった。将来は有機農業を通して平和に貢献したい、という思いを新たにした参加者もいた。また、多国籍、多文化な参加者とともに議論やワークショップを行ったことで、平和や暴力、非暴力、開発という概念に対するイメージや解釈の多様さを実感的に学ぶことができた。

## 今後の課題

今後も「土からの平和」をテーマとしたシンポジウムを、農村が持つ平和構築への可能性を探求する場として開催したいと考える。アジア学院の学生たちにとっては、多彩な講師陣から集中的に平和について学ぶ貴重な機会となることが期待される。次回シンポジウムの開催にあたっては、いくつかの改善が必要である。講義、議論、ワークショップの時間配分に注意し、参加者が十分にシンポジウムの内容を理解し、意見を積極的に共有できるようなプログラム作りを行うことが課題である。シンポジウムに対する参加者の感想で、分科会形式ではなくすべてのワークショップに全員が参加できるようなプログラムを組むべきだとの声が多くあがったことも、今後のプログラム作りで考慮されるべきである。

また、37年間、草の根の農村指導者養成を行ってきたという実績、および毎年15カ国以上から多様な農村指導者やボランティアたちが集まるというアジア学院のユニークさを活かした平和活動を行う必要があると考える。アジア学院が世界や日本の平和構築において果たしうる役割を模索し、「土からの平和」というテーマを独自のアプローチで深めていくことが今後の課題である。そのためには、アジア学院のカリキュラムおよび多文化コミュニティ、卒業生の活動を世界的な平和、開発のための潮流の中でどのように位置づけるかを検討することが重要であると考えます。そうした潮流を踏まえたうえで、効果的に草の根での平和活動を行える農村指導者の養成を行なうと同時に、世界や日本社会に対してアジア学院独自の平和活動を示していきたい。